

IPB World Peace Congress in Barcelona
Opening Plenary, October 15, 2021

和田 征子 (わだ まさこ)
日本原水爆被害者団体協議会 事務局次長

このバルセロナでの世界平和会議にご参加の皆様、そして世界中からオンラインでご参加の多くの皆さま、こんにちは。本日、皆さまの前でお話しする機会を与えていただいたことに感謝を申し上げます。

私は 1943 年長崎で生まれました。1945 年 8 月 9 日に原爆が落とされたのは 1 歳 10 ヶ月の時でした。長崎の北部の爆心地から、2.9 キロ離れた南の市街地にある自宅で被爆しました。幼かった私にはその日の記憶は何もありません。幸い山に囲まれた長崎の地形のおかげで生き延びることができました。折々に母が繰り返す話を聞いて育ちました。

原爆投下後、しばらくすると爆心地から市の南に向かってあちこちで火災が発生しました。爆心地近くで負傷し、やけどを負った人びとは、山越えをして私たちが住む市街地におりてきました。茶色の山肌に母が見たのは、蟻の行列のような人の動き。血で固まり角のようになった髪の毛、男か女かもわからない、衣類もほとんど付けていない、黒くうごめきながら山道を下りてくる人の列。母は「身震いした」と言います。その山道で多くの方が亡くなった、と思われま

自宅の隣は空襲の際の火事の延焼を防ぐために数件の家を取り壊されて、空き地になっていました。道に放置されている遺体はごみ車で運ばれ、そこで山積みになって朝から晩まで焼かれました。母はその臭いにも、そして、その数にも、目の前で起こっていることにも「何も感じなくなっていた」と言います。人間の尊厳とは何でしょうか。人はこのように扱われていいのでしょうか。私たちはごみのように焼かれるために創られたのではありません。

家の裏には井戸がありましたので、そこには大勢怪我した人が水を求めてやってきました。私を背負いながら、母はその人たちの傷を洗い、古い布を熱湯で消毒をしてあらかじめ備えていたものを包帯代わりに使ったと言います。その後その人たちがどうなったかは知る由もありません。

母は大学の講堂に開かれていた救護所に町内から、医師の手伝いに行かされま

した。床一面に横たわっている人たちの怪我や火傷の余りのひどさに、母は気絶してしまいました。気が付いてから次に与えられた最初の仕事は、親指の大きさに成長した大量のうじ虫を、箒で掃きとることでした。当時母は 24 歳でした。

アメリカによって課された厳しい報道管制によって、犠牲者の悲劇的な状況や、その苦しみは完全に隠蔽されました。投下後、10 年間、日本政府もアメリカ政府も、被爆者の苦境を無視しました。私たち被爆者は、援助を最も必要としたときに見捨てられたのです。

1954 年にアメリカがビキニ環礁でおこなった水爆実験は、その放射性降下物によって広い範囲に被害を及ぼし、マーシャル諸島の住民や太平洋上で操業していた多くの日本漁船の乗組員に影響を与えました。このビキニの核実験は、国民の抗議運動の大きなうねりを引き起こし、原水爆の全面廃絶を求める署名活動は、燎原の火のように日本全国に広がり、3000 万筆以上集まりました。そして翌 1955 年、第 1 回原水爆禁止世界大会が開催されたのです。国民の運動に励まされて、それまで世間から隠れるように生きてきた被爆者は、自分たちの声を世の中に届けるために立ち上がりました。そして 1956 年、被爆者の全国的組織として日本被団協が設立されたのです。

1946 年の第一回国連総会の第一号決議は、核軍縮を国連の最優先目標であると確認し、原子力によって提起された問題に対処するための委員会が設立されました。

世界はこの目的のために何をなしてきたのでしょうか。

NPT の発効から 50 年が経ち、そして今年 1 月 22 日、私たちが長い間願ひ、求めていた核兵器禁止条約が発効し、国際法となりました。

この重要な成果を成し遂げた原動力は、世界が、単に核兵器のもたらす死傷者の数や統計だけでなく、非人道的側面に焦点を当ててきたようになったという事実です。長年をかけて、人々は、原爆が引き起こし、今も続いている非人道的な影響について理解するようになったのです。核兵器禁止条約の発効は、大きな喜びであるという一方で、私たちにとって新たな一歩に過ぎません。

今、世界には何が求められているのでしょうか。核兵器使用の脅威は、差し迫っています。

「核兵器の人的影響に関する会議」は、いかなる国も組織も、被害者を治療す

る術を持っていないと、結論付けています。被爆者は、死、病気、貧困、そして差別を見、経験してきました。それらのことは、私たちが今まさに、コロナウイルスのパンデミックの結果、世界中で目の当たりにしていることです。コロナウイルスは、数年後には様々なワクチンができ、一応の終息はするでしょう。しかし、核兵器が使用されたら、人も生物もいなくなった地球が残るだけです。死者を弔う鐘を鳴らす人もいません。

私たち被爆者は、自分たちの体験を語るたびに苦悩と悲しみの瞬間を追体験しながらも、核兵器廃絶を訴え続けてきました。被爆者の平均年齢は84歳を超え、毎年9000人余りが亡くなっています。

私たちは、自分たちの声をもっと聴いてもらいたいと願っています。世界中の政治をつかさどる人、外交官、科学者、そして平和活動をしておられる方々にも。それは私たちが経験してきた被害や苦しみを、誰にも二度と経験してほしくないからです。

日本政府は核兵器禁止条約に署名、批准することを拒否していますが、国民の71%は条約を支持しています。被団協は今、唯一の戦争被爆国として政府に署名・批准を求める署名活動をおこなっています。

核兵器禁止条約で、核兵器のない世界へと続く扉が開かれました。しかしそのような世界を達成できるかどうかは、核保有国とその同盟国の政府の、核抑止政策を放棄するという決断にかかっています。そして同時に私たち市民の、政府にその決断を促す行動にかかっています。そして、私たちに求められることは、心の中にある武器を捨て、祈り、人々と対話をし、ともに行動することです。

私たち被爆者は、残された命と力のある限り、皆様とご一緒に働くことをお約束します。

核兵器は人間が作り、そして人間が使用したものです。ですから私たちは、私たち自身の手と公共の良心によって、それを廃絶しなければなりません。

さあ、みなさん、ご一緒に活動を続けてまいりましょう。有難うございました。